

地域医療の現場から

“医師として島の人たちに 育ててもらった”

姫路港から定期船で30分のところに家島があります。人口は約2千人、高齢化率は54.92%、そして漁業、海運・採石業が盛んです。坂道や狭い道が多く、島内での移動手段としては原付バイクを利用される方が多いです。島には家島診療所を含め2医療機関のみです。家島診療所所長の田畑雅彦先生は30年にわたり住民に寄り添いながら島の医療を支えてこられました。島で働くということや、今後の地域医療に対する思いについてうかがいました。

姫路市国民健康保険家島診療所
所長 田畑雅彦先生



—医師になられたきっかけは

「元々は歴史が好きで考古学者になりたかったのですが、祖父の願いもあり、医師の道に進みました。兵庫県豊岡市の出身ということもあり、医師が足りていない地域があるのであれば少しでも貢献できればと思い、自治医科大学へ進みました。卒業後、最初は淡路島の病院で2年勤め、家島診療所に2年勤めました。その後、県北部の病院で1年勤め、自治医科大学で2年勉強し、家島診療所に再度赴任しました。最初の2年間と合わせると30年あまり家島診療所に勤めていることになります。」

—診療体制について

週に5日（月～金）診療を行っています。1日平均50名の患者が来院されます。かつては2人医師の体制で診察をしていることもありましたが、平成28年からは田畑先生の1人医師体制となっています。診療所のお昼休みにはバイクで往診に行き、また、学校医として、子どもたちの健康診断も行います。「子どもたちと一緒に給食を食べるのは楽しいですね。」と先生は笑います。それに加え、主治医意見書の記入などの医師ならではの書類業務もあります。離島のための救急艇やドクターヘリの体制も整っています。また、島内は坂道や狭い道が多いため、軽四輪救急車もあります。



救急艇



軽四輪救急車

— 家島で30年働いてこられた中で嬉しかったことはありますか。

「最初に家島に赴任するとなった時に、勤務先の淡路島まで家島の人たちがわざわざ迎えに来てくれたことですね。まだ明石海峡大橋も通っていない時代でしたので、船で淡路島まで若い医師をわざわざ迎えに来てくれたんです。その当時は分からなかったのですが、今思えばすごいことだな、親切にさせていただいたなと思いますね。家島に最初に赴任した時は、島の人たちの言葉の荒っぽさや声の大きさに圧倒されました。最初は慣れないこともありましたが、私にも少しずつ島の人たちのことが分かり、島の人たちも私がどんな人間か分かってくれ、お互いに慣れてきて働きやすくなって続けてこれました。」そして、「島の人た

ちは人情がありますよね。」と何度もおっしゃる姿から、島の人たちとの信頼関係がうかがえました。

— 「先生は患者の話をしっかり聞いてくださる」と住民の方にうかがったのですが、患者さんを診られる際に意識していることはありますか。

「病気のことだけを聞かないようには気を付けています。いくら島の人たちと顔見知りで親しいとはいえ、患者さんは病院に来るときは緊張していると思うので、病気のことだけを聞くのではなく、できるだけ雑談をしながら、相手のことに耳を傾けるようにしています。雑談の中から診断のヒントにつながることもあります。」と語ります。先生が話をしっかり聞いてくださることが患者さんの安心感へもつながっていることが分かりました。



診療所内部の様子



診療の様子



診療所外観

—離島ならではの心掛けはありますか。

「本土であれば陸続きのため、何かあれば救急車で専門の大きな病院へ搬送することもできますが、離島なのでここで食い止めなければという思いがあります。」基本的には内科を専門とされていますが、専門外だからすぐに他の病院へ紹介というわけにもいかないで、傷口の縫合も数針であれば行われます。また、胃カメラやエコーなどの検査も先生が行われるそうです。

—専門外の技術はどうやって勉強されたのですか。

「2人医師体制の時に研修日というのがあり、そこで本土の別の病院に勉強をさせてもらいに行きました。島から来ている医師のため、親切に教

えていただいたと思っています。私の技術がこの家島の医療技術になってしまうから、私が勉強をして新しいことを覚えていかないとね。」と先生は話します。

また、診療所の事務長もこう語ります。「紹介状を書く時も、先生は何の疾患かあたりを付けて紹介したいという思いが強い気がします。先生が若い学生さんたちに対して言っていたことがあるんです。『病気を見つけるときに不安があるかもしれないけれど、患者さんがこの先生に診てもらいたいと思って来てくれているのだから、分からないと言って返すわけにはいかないようになってくる』と。」このことから患者さんの気持ちに応えたいという先生の姿勢がうかがえます。



島内の路地は自転車移動



港の様子

—地域医療とは

「最近、コストパフォーマンスで評価されることが多いと思いますが、医療にはその考え方は合わないのではないかと先生は言います。「重篤な疾患以外でも、どんな些細な病気であっても本人にとったら辛いでしょうし、人の命をお金で判断するということはできないと思います。だからといって、医療機関だけが湯水のように自由にお金を使ってよいかというわけでもない。日本は国民皆保険制度によって、田舎でも都会でも自由に医療機関にアクセスできるし、どこであっても平均レベルの医療が受けられるということが良いところだと思っています。人口減少時代に、コストパフォーマンスが悪いという理由で田舎の方が切り捨てられないかということに心配しています。都会にいても田舎にいても平等が保たれてほしい。というのが私の願いです。」と先生は語ります。「医療の谷間に灯をともし」という母校（自治医科大学）の精神が先生の中にも息づいています。



船で家島に通う人たち

—家島への思い

「右も左も分からない若い時から長いことこの地域にお世話になっていて、島の人たちに医師として育ててもらったと思っています。だから本当に感謝ですよ。私の希望としては島の人たちと一緒に年を取っていけたらと思っています。嬉しいことや悲しいことを一緒に共有しながら年を重ねていけたらいいなと思っています。その中で、次の世代の若い医師にどういう風に受け継いでいくかということを考えていかないといけないと思っています。島の方々を大切にするという気持ちのある人を見つけていかないといけないなと思っています。」

—互いに思いやる温かい信頼関係に触れることができました。

先生はできるだけ長く島の人たちの健康を守っていきたくておられ、一方で島の人たちも、先生には少しでも長く続けてもらいたかったので、先生のことを気遣い、無理なさらさないでほしいとおられました。互いに思いやる温かい信頼関係に触れることができました。地域医療では、医師不足や後継者不足などの難しい課題もありますが、医師と住民との間で長い年月をかけて積み上げられた温かい信頼関係が魅力であると知ることができました。



高台から望む